

【研究ノート】

言語に関するノート

東 宏 治

言語を思考すること

○生命と
言語と
精神と
の
関
係

関係というのもおろかに感じられるほど、ぼくらには分析不可能な錯綜した対象なのだ。関係、というよりもからまり具合を闡明すること、そっくりそのまま、提示して見せることができればいいのだが。

○すでに言葉のなかに、生命と精神とが混じり合っているのだ。そのことが一番明瞭に観察できるのは、ぼくら

がものを書きつつあるその瞬間を反省するときだ。そのとき精神とは、心のなかをのぞきこみ同時にそこでの思考の運動を照らし出しさらに表現を託するにふさわしい言葉を手探りしているところの、いわば頭部に灯カンテラをとりつけた地底の炭鉱夫といった様子の、光のような（それ自身光だと言ってもよいような）注意力であるが、こういう精神の冷静な作業の傍にあって、それ自体言葉とは何ら関係のない音楽のような生命の高揚した流れが、いまにも精神の命令の発令とともにすぐほとばしり出ようと、自制するのが苦しいと見えるほどちからに満ちて、待機している。そして選ばれた言葉の連なりが浮上しはじめると、生命は、ぼくらの命が発散するあらゆる靈気

を、あたたかくもあり生臭くもある息に乗せながら喉元まで押し寄せ、音声へと変じてその言葉の意味と肉を伝達する。つまり、言葉の音、文章のリズムは生命の、意味は精神の、それぞれ顕現なのだ。

○ぼくが喋っているとき(ふとぼくは気づいた)、それはひらがなを発音しているのでもなければ漢字まじりのひらがなで語っているのでもないということだ。それに気づいた瞬間をいま思い起してみると、ぼくの喉のあたりを、或る切れ目のない、多分ぼくがそのとき意識することがなかったらそのまま決して尽きることがなかったらうと思える、実体のある(肉のつまった)流れが流し通過していたように思える。その実体というのは、(錯覚だったか、今書きながら後からするこじつけのせいか)夢の映像の物質感や、物体を前にしたときに知るあのぼくを陶醉させる充実の感じと同種か類似していた。

(息の、生命の流れ。)

○現実世界や夢のなかでは、声は耳に不明瞭であったり大きすぎたりするけれど、精神のなかで思考の際に聞えてくる声は(あれは自分が自分に向けて喋る声なのだろうか、それとも誰れかがぼくの頭のなかで喋っているのだろうか)、つねに明確で、その音は大きすぎることもし過ぎることもない、過不足のないものだ。この思考の声こそ、言葉(言語)そのものもつ音声なのだ。それは、本を黙読しているときにもぼくらの耳のなかで鳴っている音であり、著者の声というよりも、言葉(言語)のもつ音であり声なのだ。……しかし時にその文章の声をそのままに、現実の世界で出す講演者や対話者があって、そのとき聴衆や聞き手は、ほればれと、いわばその人の肉体を通りこして、思考そのものの発する(語る)音声に耳を傾ける。聞くぼくらの前に、現実世界ならぬ(いわばイデエの?)世界が存在し繰り広げられるのだ。

○言葉は伝達の道具などではない。言葉は、読み手、聞き手に、その伝達されるべきものの直感（ひらめき、理解）を与える情報であり光なのだ。言葉は、語る人が相手に手渡したいと願っている「もの」の先ぶれのようなものだ。丁度、音や光のように、言葉はまず先方へかけ込んで行く、そのあとで鐘や電燈が運ばれてその人の眼前に置かれるように、その言葉のさし示す「もの」が現われる。聞き読む人は、この「もの」のことを絶えず思い浮べてい、思い浮べようと努力するのになかったら、先方の言うことが理解できないし、理解できたことにはならない。

○意識すること、心の裡をみつめること、記憶力によって記憶(像)を呼び起しそれを注意力にみつめさせること等は、いずれも言葉や言葉の働きを観察し考察すること、つまり言語(この場合内的言語)について考えることだ。そして批評とは、他人の文章表現、つまり言語(外

的に結晶した言語)について(則して)考えつつ他人の心のなかの言語の働きを想像してみる行為だ。

(言語活動に則して考える言語、既ち意識、批評、翻訳：)

○メタ・ランガジュリー的な能力(つまり、言語について考えることのできる能力、感覚)を身につけるのに比例して、ものを書く能力や語学の能力が大きくなる。これは、言語の起源が、人間の外界・内界の知覚をさらに知覚する能力(意識力。自己の二つの分裂)にあること(ヘルダー)を考えれば当然のことだろう。

また、意識的であることが何故つねに精神の成長(ないし変容)の原因となり、恐らく必要条件となってきたか、今にして分る。

○ぼくらの頭のなかをふとよぎるひとつの思念、——その速度にとうとう追いつけないとき、惑いは注意力の散漫のゆえにその思念の通りすぎるのをまるまる見過す

とき、人間の思考には実は言葉などともなっていないで、思考は、もっと別種の、(例えば電流のような)凡そ言葉とは異質な物質から成り立っているのではないかといった気がする。

しかしこれは要するに、お前の注意力が愚鈍であったためなのだ、よく見さえすれば、その思念の外姿が、つまり言葉が、よく見えてくるはずだし、惑いはお前が言葉をたずさえてその思念を追いかけ、その思念に言葉を被せて、丁度透明人間に服を着せればその人の姿が可視的となるように、目に見え耳に聞えるようにできるはずなのだ。

○言語の二面性。言語は恐らく外の世界そのものであり、かつ内界を形造っているもの(成り立たせている物質・材料)だ。

言語が外の世界であることを認めがたくしているものは、文字で書かれ、音声で現われるからだ。眼に見え耳に聞えるこの物質性の故に、文字や音声の意味する世界

が外の世界であるとは認めがたくなる。同じように見え聞えるにしても文字や音声には外物のような「物」性がないから。(例えば「岩」という文字は現実の岩を意味する、という。ところが現実の岩は岩であって意味はもたないのだから。)しかし同時にこの言語の物質性(文字や音声という形と音)は言語が外の世界であることの証拠なのだ。

言語の二面性は、人間の外界との交渉の象徴なのだ。外界が人間に現われるその現われ方は、書かれ話された言葉を通して世界が現われて来る様と類似している。ぼくたちをとりまく世界が外に在りかつ内に在るように、言語はぼくらの外に在りかつ内に在る。

○《Ce qui n'est pas "dans l'espace" est dans l'esprit. (Donc le "temps" serait...esprit !)》(Cahiers-28-876)

それなら、言葉はどうだろうか。文字として音声として空間に存在しているようでもあり、精神裡にのみ存在しているようでもある。――言語の二面性。この種の存

在を他に探してみることに。

○言葉と物と心(精神)との、それぞれの体系が、それぞれを写しあって、互いに似ているが、言語の体系は、外物世界の体系より精神機能のそれにより一層近い気がする。

○思考や想像力の世界、ここでは言葉自体がその実体なのだ。ここで現われたり消えたりする観念や映像は、常に言葉をとまなっており、むしろ、言葉そのものなのだ。というか、これらの観念や映像をそれぞれ互いに他から識別させる外姿(形)や表情が言葉なのである。この言葉は従って変幻自在だ。

この世界の事物は、外界の〈物〉に類似した、一種の「対象性」をもつ。

表現された世界、ここでは言葉がこの実体をなすのではなしに、この世界を、丁度建物をつくるように、外から或る空間をとりかこんで建造するのである。この言葉

は従って殻のようなものだ。

○言葉や概念(専門用語)は、誰れもが勝手に内容を注ぎ込んでもよい形骸にすぎない。或いはそれらは粘土のように、自由自在に形を変えることができるので、誰れにも、自分はその言葉や観念を理解し所有していると信じさせるものだ。同一の言葉、同一の観念という名の下で、異った内容が向いあって論争し、いがみ合っている。

はじめこの言葉は、二人の意気投合のしるしだった。ところが話し合ううちに、同じ言葉を用いながら、まるで違った塑像をめいめいが形造っていることにかれらは気づくのだ。

(作る人間対読む人間。論争する二人。等々)

符牒のような言葉を覚えてはいけない。物を見つめていること。その物について喋ると、ふと気づいたときには、言葉がその物の周囲に並んでいる、といった風に書くこと。

○例えば顔の表情、それは立派な言葉だといえる。も
の言わない事物も、もしばくりに聞く耳があれば、立派
な一センテンスであるといえる。外物はいわばひとつひ
とつの言葉であり、外物と外物との間の「位置」関係はひ
とつの文章を形造っている。外物群の或る範囲はひとつ
の段落だし、外界自体が大きな書物だ。

○絵画という「言語」、彫刻という「言語」……の翻
訳について。

○色や音よりも、言葉という抽象的な道具の方が、人
間の感覚や知覚や思考を（あるいはそれらの反省を）正
確に伝達し表現するような気がする。

というか、今ぼくに起っている感覚、知覚、思考をそ
のとき感じ意識するちからに、言葉というマチエールが
一等近似しているのだ。

色や音による表現は、現在の感覚、知覚、思考の伝
達、描出を行うというよりは、新たな現在の瞬間の感覚、

知覚、思考の現出を惹起することになってしまいうから
だ。

○言葉の世界、言葉の形成する宇宙と、現実の世界、
事物自体との間の関係について。（とくに敵対の関係）
（対峙と融合）

○「……一九二九年ごろには「老夫人は」なかば眠っ
ている状態に陥ったが、それでも昔あったできごとの話
をよくした。ただし、まるで主の祈りでも唱えるような
具合で、いつも同じ言葉と順序で話をするので、わたし
などは、それらの言葉は対応するイメーヂを欠いている
のではないかと疑ったものである。……」（『ボルヘス』老
夫人』一〇四頁）

○へあの樹の葉むらのそよぎが……という一節を目
にし耳にすれば、多分知性は、この語群から「そよぎ」
のみを記憶し、それをこの語句の伝達する主要な意味と

了解して、次にくる文句を待ちうけることだろう。しかしこの語句を発した人の眼(意識)には、「樹」も、その「葉むら」も、またその葉むらの「そよぎ」も、全部が同時に、視線を別のものに移すまでの短い時間、写り続けているのだ。

そして丁度その人の意識の網膜に、こういう全体が映じている様を、上の語句はほぼ正確に写しているといえる。(ただし「樹」↓「葉むら」↓「そよぎ」という順序なしの語順は、眼の前の現実に存在するというよりも、論理的必要あるいは言語統辞法上の要請による。)つまり言語による思考の写像^{マッピング}。(というのも、思考は、言葉を用いて運行されるからだ。すでに言葉が、人間の思考という無限定のものを分類し整理し、いわば計量しているからだ。)想像力(読書力)は、だから一語一語に写像を現像しつつ読みすすまなければならない。

○丁度、西欧の人類学者たちが例えばインディアンの文化を研究するのと同じような眼と驚きと関心と同感と

疑問と不審の念と熱心さと敬意と、その他もろもろのを以って、ヨーロッパの諸民族を諸文化を研究すること。そこに(民族に、文化に、それぞれの伝統に)何らの(例えば先進、後進などの)差異はないからだ。文明はどこにも(動物や多分植物の世界にも)存在するからだ。

○読み手に好都合な読み違え、とり違えの起るゆえんは、読み手自身のそうと知らずに自分の裡に眠らせていたところの思念が、その読書中の本のなかのその行の言葉や文字にすがりついて浮上してきたというところにあるらしい。読み手は、著者ではなく自分の思想を読みたがっているのだ。

○ヘルダーの言語起源論の根底に、いわば生物学でいう「個体発生は系統発生を真似る」という考えに似たような仮説、つまり、人類の言語発生は、根源的で本質的な詩人たちが日々再現し再演しているのだという直感の

ようなものが存在しているのだ。

○文章には、物そのものを描くことはできなくて、物と物との関係を書くことしかできないからこそ（たとえ或る一つの物を描写していても、それはその物のなかの部分と部分との関係を描き出しているにすぎないのだ）、翻訳で他国の文章が理解できるし、また他人が自らの体験を語る文章に参加できるのだ。何かこの、いわば透き間だらけの、骨組ばかりの構築物が、透き間があり骨組にすぎないからこそ、他者の語る体験の中へ、他者の生命や感覚現象の内へ、這入りこめるのだろう。即ち、肉部（つまり存在そのもの、物の肉体）を想像力で充填する行為。

このような観点から、文体論（文体学）を考案してみる

こと。

○辞典という、一つの言葉を別の言葉で説明するものの存在が、人間の認識行為の正体を表わしている。即

ち、あるものを理解するのに、別のものを対置して比較対照すること。

○《Classer les mots en catégories
en familles

1^{ère}—des mots qui définissent tous les autres

2^{ème}—les mots définis par les 1^{ers},

classés selon les matières spéci-

ales. (Cahiers-XIII-540, Pl. I, P. 431)

○《Dictionnaire

des mots essentiels de la langue ou

des valeurs raisonnées des termes

qui expliquent) — tous les autres.》

ou définissent (Cahiers-XIV-881, Pl. I, P. 435)

○ぼくを形成しているぼくの言語——ぼくの人格であり、限界であり、ぼくの内部というほの明るいうす暗い領域であるもの。

そこは一種の、新しいタイプのア、リ、地獄のようなもので、ここから外へ這い出たいと願い、企図しても、足場であるはずの、自分のものたるべき言葉の意味や使用方法というものが、足をそこに置いてよじ登り始めると、ポロボロと崩れかけたり、トリック映画か夢のなかでのようふっと溶解してしまつて（自分自身のなかで見つけ表現に供するところの言葉の意味が、実は自分にもよく分っているものでもなく、その使用法も、使ってみるまでさほど熟知していたわけでもないのだ）、相変らず得体の知れないそこ、に閉じ込められていなければならぬ。

○何故心の裡は、外物がいやでも眼に写るようには見えぬのだろうか。

心の裡は、見ようと決心し↓しかし見る努力はするが見えそうにないと思い、↓絶望しかけるとふと希望の光のようなものに照らし出されるもの（電光に照らされた観念！）があつた気がし、↓この瞬時の光を想い起そうと、試行錯誤をするのだが、この努力のための糸口であ

るところの、光に照らし出されたとき見えたように思われた光景の記憶は、この記憶をたぐりよせじっと目をこらしていると、見えたときは確かに何かの風景を見たよ
うな気がしたのに（だから「光景」といい「光」というのは全くの比喩と片づけないうで欲しい）、実は言葉なのである。（つまりこの観念は、瞬時見えたときは風景（映像）のようで、ひき出してみると正体は言葉であるわけだ。）
……

心の裡は、こうして考え直し、思い起し、空無に立帰り、言葉を見つけ、言葉をつなぎ合わせ、言葉を当て、また捨て、再び当て直し、行きつもどりつしながら、少
しづつ言葉の形で、構築しつつあの瞬時を再現するのだけれど、（又、そうして行くにつれ、いかにも心の裡をのぞき込んだ気がするのだが）今になってよく分ることは、自分が心の裡をのぞき込みも再現しも出来ていないことであつて、ただ自分は言葉の世界のなかで立ち働いてきただけなのではないかという疑いだ。

言葉の世界は（少くともぼくの頭のなかの世界は）必

らずしも秩序立って存在しているわけではなくて、この言葉の世界は、ぼくらが文法と統辞法の制限範囲内で最大限の自由な創造を発揮しながら結局のところ自国語の可能な語の組み合わせと組織化を実現しつつ、固定化され構造化されてゆくのだ。

いつの間にはぼくらは、自分ののぞき込んだと信じた心の裡を離れて、言葉の世界の内を織り綴る仕儀に立ち至ったのだろう、こうして出来上がった言葉による構成物の、あの心の裡(それはもう記憶にすぎなくなっているし、その記憶もこの言葉の建造物にすぎなくなっているが)との関係はどんなものだろう、そしてそもそも、この書かれた文章とあの心の裡とは無関係だと感じ断じるその働きは一体何者なのだろう、さらに、こういう疑問をいまつづる心の働きは一体意味ある行為や観察をしているのだろうか？

○読むことは元来分析的で、ぼくらが懐疑を常にもって解読してゆくのは比較的(書く場合に比較して)容易

だが、書く段になると、書くことは生命的、有機的な行為だから、自分のなかで生まれつつある声を懐疑するいとまもなしに、我に返ったときはすでに喋っているのであり、自分の喋ってしまった声を聞いた以上、それが自分の生命の発露であるからには、正・不正・適・不適・差恥・後悔等々にかかわらず文字にせざるを得ない。

言葉や言語(つまり言葉の働き)についてぼくらが反省するのは、おおむね書かれ話された言葉を読み聞く際にであって、何故だか好きになれない語り口をする他人の、自分がいま批判したばかりの言葉使いや、自分にはとてもその意味が把握できないと皮肉まじりに告白し指摘したその当の言葉などを、いざ自分が批判し告白するその自分の話のなかではちゃんと使用出来ているのだ。そういう時に、言葉がどんなにか自分たちの本能的な活動に這いり込んでいるか、そしてそこから母国語を抽出し(あるいは剔抉し)ごく普遍的な純粋な言語や文法を抽象する(残す)ことがどんなにか困難で、生身から表皮をはぎとるようにつらいものであるかが理解される。

○言語の思考法

言語はどのようなものを考え、どのように世界を整理分類するか。

丁度ばかりが、誰かばかりの親しい人間の感じ方や考え方をよく知っていて、その人のどんな断片的な告白もよく理解できるように、言語そのものの感じ方(！)や思考の仕方をよく識れば、どんな人間の表現する文章も、その言語を使用する限りよく分ることだろう。

○ぼくにとって全く未知な内容を伝える文章を前にして、この文章を構成しているいくつかの語要素のメカニスム(組み合せぶり、からまり纏によられるその具合)を真似て、精神が同型のモデル(メカニスム)を、完全に非物質的な素材を用いて、形造ろうとしている(それに成功するか否かは分らないが)のを見るとき、精神と言語との間の区別が極端にむつかしくなる。

○注意深く本を読む折に、文章の記者の位置(視点、

遠近法)を手探りにしながら読んでいる場合に、記者の記述する手つき(手練、方法)を暴露しようと努力して読む際に、とくに小説を読みながらぼくがいつも気にし気味悪がっていたもの(というのもその正体をつかめたためしかなかったし、創作しつつある作者を肩ごしにのぞき把えたつもりになっても、つねにこの両手からすべり落ちていたからだ)の正体がやっと分った。それは記者(作者)とは、(彼の精神、意識、思考、意図、計算とは)無関係なものだ。それは人間ではない……。そのくせ、いかにも記者の口吻を真似ているので、実に冷静で意地悪な人間がいるように見え、読者であるぼくを、たとえどんなに正確に読みとったと自信を持っていても、背後で嘲われているようないやな気持ちにさせるのである。それは幽霊にすぎない。(それは恐らく人類の影のようなものだ)……

それを昔のひとは言霊ことだまと言ったのかもしれない……。それは言語という体制だ。

○心の中を凝視^{みつ}めながら思考を言葉に置きかえてゆくときに、自由に選んで置いているはずの言葉そのものが文法や統辞法の約束ごとの制約を受けて文章に綴られてゆくのをみると、出来上った文章は、自分の精神の産みだしたものだというよりも、すでに存在していて文章の形と一定の型をなしたものに、不定形な精神物が流し込まれただけのことのように思われる。書きつつあるぼくらが在るのではなくて、前以って形式を身にまとった或るものがぼくらを待ちうけているのである。ぼくらが語りたかったことがら、ぼくらの内部に存在していたあの不安定で流動的で瞬間的な、いわば夢の実体のようなものは、いまぼくらの手によって文章化された文章の形式や意味とは別なものだったかもしれないのだ。世界中に現存している文章は書かれ話されたことばばかりであって、それは、書き話すひとが吐きだしたというよりも、吐きだしたものを直ちに強制して固形化したものにすぎない。書きつつあり話しつつあったぼくらの裡の語るものは、己れを待ち伏せ枠組のなかへ組み込もうとするもの

の存在に気づくと突然に自信を失い、自分が語っていないのではないような気持ちになってしまう。すでに自分の語ることがが外形をとって自分の眼前に存在するのを見るような気がするのだ。

○文章を綴る際に自分の用いる構文の数と形態とが実にごく限られていることに思いあたるとき、自分のこれから書こうとしつつある「内容」以前に、そもそも書き続けることの徒労感、無力感（何か壁にたちふさがれている感じ）に襲われて、ぼくは絶望する。

○世界の構造を探究する代りに（或いは、探求するために——どちらも同じことを言っているのだが）、人間の世界認識の構造を明るみに出し、明文化し公式化すること。又、いつかは、動物の認識の仕方（同様に、もし存在するものなら「火星」等のそのの）パターン化を試みることに。

世界は、こういうそれぞれの認識法に則って認識され

る風にしか、それぞれの認識にとって存在していないの
 だろう。認識の全ゆる型式を蒐集すること、いつの日に
 かは……。

恐らく言語は、そういう認識型式の一つだ。

○世界を測るためのカテゴリー制定の必要と、さらに
 不必要。

○人間のあらゆる認識の、それぞれの根底にある単純
 で抽象的な体系をこしらえること（というより発見する
 こと）。まずはその体系のいくつかの（有限個の、しか
 も少なれば少ないほどいい）単位を発見すること。

この体系は、言語、表情、ジェスチャー等の全ての表
 現体系に共通するところの、それらの骨格のようなもの
 だ。

ぼくらが、対象がどんなに異なったものであれその対
 象を理解でき、また（もっと具体的な例を挙げれば）ど
 んな国語も、学習しさえすれば理解できるようになるそ

の理由が、この体系を生来所有していることにある、と
 言える風な体系なのだ。……

ものごとの間にアナロジー（どんな意味でこの語をと
 ろうと、またどんな分野にあてはめようと）を感知する
 能力は、要するにぼくらがこの体系を所有してい、この
 体系という形態をとるところの能力が機能しているのに
 すぎないということなのだろう。……

例えば、フロイトのように、人間の全ての意識的、無
 意識的行為を、或る単純な（数もわずかな）、本能的・
 性的・生命的な幾つかのエネルギー（「欲動」）の組み合
 わせ（ないし葛藤、からみ合い）として解析するという
 考えも、この体系の一変種のようなものとなるだろう。
 ……

○読んでいる本に落している視線の片隅を、よぎって
 ゆくものの影があつて、それが鳩であつても蝶であつて
 も、とんぼであつても違わないような、そういう抽象的な

存在の仕方をする、又そういう抽象的な認識をする感覚的な部分が、眼と精神との境目にある。

数学にあつては、二個のリンゴも二個の小石も「2」という数字（ないし概念）として認識されるが、そこではそれに似た抽象性をもちながら、同時に、それと異つて、ある種の、いうならば抽象的に具体的な感覚をともなっているのだ。

○人間の裡にある「体系」が、ぼくらの認識の限界だ。ぼくらはこの体系によって世界を限り分類しようとするから。どこまで遠くへ歩いて行つても、どこまで道具を使つて拡大しても、最終的にはこの「体系」が認識し整理し理解するのであつてみれば同じことなのだ。道具を使うのも歩みよつて行くのも結局、感覚（知覚）を拡大し鋭敏にしていることだからだ。

○言語の抽象性。

言語の機能の欠点と長所とはともにここに発している

ように思われる。

○言語の論理性。

言語はどういう類の論理体系をもっているものなのか、そのかたちを表わしてみることに。

○（再び）

言語の抽象性。

言語の論理性、即ち、言語の法則↓「文法」、「統辞法」。そしてこの言語の「抽象性」と「論理性」とは、人間の心（精神）を統べているところの「法則」を恐らく写しているのだろう。

心（精神）の裡のこの法則の写像（地図）が、言語の「文法」であり「統辞法」なのだ。

○文法に関する規則について、例外のない規則はないと言われるものの、いつか人間の論理的な働きをもつと繊細に検討することのできる能力を精神がもつようにな

れば、例外のある規則はないと言えるようになるかもしれない。

○文章にする(書くにしろ喋るにしろ)ということは、自分のなかでいま生きている不定形を、認識を、一定のカテゴリーに分類することだ。人間の認識の型としては五つ(或いは三つ、↓五文型・三文型)しかなく、格を示す前置詞(ないし助詞)は、ほんの幾つか、ともかく数えつくせる有限個しかない。

途切れないひと続きの思考が、自己を意識しつつ、とはつまり、自己の流れを見つめつつ、何が(誰が)／どうする(どうした・どうするだろう)／何を?／何に?／どこへ?／等々、自問自答しつつ、自己を幾つかの切れ端にぶち切って行くのだ。自問自答するとき、すでに文章の形で(ぶった切られた形で)、この思考という空気のようなものが、光のようなものが、薄暗がりのようなものが、問い答えしている。問うものは己れのなかの書きたい望みであり、答えるものは、自在に書くことを身体

で覚えたぼくたちの指先と、指先のペンだ。

○世界を表現するために、染料が発明され、7色が抽出され、12色になり24色の色階や色調の体系ができ上り、……最初の楽器が作りだされ、7音や12音の音程に気づき、調性の分類が生まれ、……同じようにして単語や品詞や文型や文法が形造られているのだ。しかし他方で人間の手が描き塗る線や面は、人間の生命であり、これまた同様に、人間の声があり、人間の言葉にならない叫び声が存在している。

○同じひとつの口で、ぼくたちは食事もすれば言葉をあやつり、また糸をかみ切ったり等々する。……行為は無数にあっても、その行為をする器官が限られているところから、比喻とかメタフォールが生れざるを得なくなるのだ。

○外国語を習得することのできる能力を形成する一要

素(恐らく)、即ち言いかえ。 自国語の或る単語(又は単語群)で言うべきことを、同じ自国語の別の語義をもつ単語(群)を用いても言いかえができること。この可能方のおかげで、自国語の単語と外国語の単語とが一对一の対応をするわけではないのに、それらを一時対応させて、この他国語の使用法を学びつつ、いつしか他国語の文法や統辞法を、自国語とは別箇の体系として所有、修得できるのだ。

○外国語の文章を読みながら、ある単語をその国語の辞書で引くとき、ぼくらはその国語で思考しているのだ。それでもなおその文章の意味が分らなくて、例えば仏和辞典で調べてみると、それはフランス語での思考についてゆけなくて、今度は日本語で思考しなおしてみているのだ。……とりわけ、よく知っているはずの単語を仏和辞典で何度も何度も引くこと(まさにその辞書に相談すること)を余儀なくされるとは、なじめないそのフランス語の思考(文章)に慣れるための、その思考の仕

組に参与するための、手だてを与えてくれることを(道すじを照らしてくれることを)、その辞書に求めるということだ。

○日本語の拡がり、フランス語の拡がり、それぞれの拡がりのなかで、それぞれが独自の生と思考とを要求する法(律)や慣習をもっているのだ、ぼくらはそれらの国語で喋り読書し思考する折には、《郷に入っては郷に従》わなければならぬ。しかしその拡がり(それらの郷)が(ぼくらの心の裡に存る(外にありかつ内にある!)ことを考えると、人間の心は外界と同じ廣大無辺だ。

そしてぼくらが例えばフランスへ行つて、とある街角で知らなかった新しい言いまわしを見つけると、ぼくらは、そういうばその街角とその言いまわしとは、ぼくらの内のその言語の街なかに、これまで気づかぬまま以前から存在していたことには、じめて気づく。

○一つの文章を前にして、ぼくらの思考がどんな風に

展開されるか——一つの原文を前にしてぼくらが思考する際の、その様子、継起、混乱、秩序と、別な国語による訳文を前にして、同じぼくらの思考がどう運動し展開されるか、それら二つの思考運動の様子を比較すること。

そのとき、この二つの思考は、それぞれの国語の規範に従いつつ、又時に規範を無視し逸脱しつつ、その論理の道をたどっていることだろう。この論理の道を記述すること。

○外国に永年住み、その国語に堪能となり、その国語で思考する人が、あるひとつの語にぶつかり、そのニュアンスを定めようと精神を集中させているとき、その人の頭のなかで人知れず、また本人自身も自覚なしに行われている、精神の思考と批評と追憶の行為を日の光の下にさらけだしてみれば、それは外国語の下手な、経験不足の人が、それでも熱意と注意と細心と徹底とをもって、幾種もの辞書をひきながら比較して、そのニュアンスを

定着(定義)しようとしている様子と、結局似たものなのではないだろうか。

一方は全てが頭のなかで、音もたてず、辞書も、それを繰る指も表情もなく行われるのに対し、他方は、その努力の目に見え聞える物音や動作がともなうという違いはあるにしても。

経験は、辞書と想像力との別名だと、後者の人間は(不遜にも)信じているのだ。

○外国語を翻訳することは、星空をあおぎながら自国語の海のなかをあっぷあっぷやっているようなものだ。せっかくの海面に映った星影を、自分のあがきで乱しているのだ。翻訳しないで外国語を追いなながら読むことは、浜辺に坐って、夜空でひかっている星と、それが海面にしずかに映ってゆるやかにうねっている様子を、だまって感動を心にいっぱい感じながらながめていることだ。外国語がぼくらの国語をチラチラ照らしている様子は、他人の理解がぼくたちの心を照らし出すときのよう

である。この海上の光を手で掬いたくて、ひとは再びおきへ泳ぎ出るのが、それは光をみだし、またしても国語のひろがりのなかであがく結果に終る。

○翻訳しながら、或いは思考しながら、適宜言葉を拾いあげるときに、ぼくの頭のなかでゆったりとした流れに浮きつ沈みつしているそれらの言葉をながめていることの楽しさ。とりわけこの流れが、流れているというところが、そこを言葉が浮きつ沈みつしているその運動の感じが、ぼくを幸福にしてくれるのだ。この考えているという一状態と、今生きているのだという喜びとの、至福にみちた一致の時間。一致していることの淨福。

○文章(日本語の、外国語の)を読みながら、そこにひとつの単語を辞書で引いては、立ちどまり、道に迷い、連想の導くままあらぬ方向を散歩し、思わぬ小路や窪地を探索しつつ、なかなか一行の文章の終りまで(了解にまで)たどりつけないことの、たのしさ、つらさ、虚しさ。

文法

○言語、即ち、精神の、世界との関係(或いは、精神と世界との関係——この方が正確かもしれない)。そして文法とは即ちこの言語の構造。

○語の音声としての面
語の意味としての面
語の文字としての面

○言葉とは、現実の、「もの」の、想起記号(cf. ヘルダ)。だから、音声と、象形(文字)という、二通りの想起記号が生れたのだ。(他に想起記号を探すこと。)

○人間の思考を描写するものとしての音声、音声を描写する(写す)ものとしての文字。(cf. 『ポール・ロワイ

ヤル文法』)

○三つの置換

外物 → 映像

自分の感覚知覚を意識すること

映像 → 音声

(言語の発明)

音声 → 文字

○言葉を、音符か音のように、色や形のように、取扱うこと。

○ぼくらの喋り書く言葉を音声の連続としてのみ(ということは一応意味——語義・文意その他——との関係を傍に置いて、といってもそれをいわば横目で見やりながら)耳と眼とあたまつまり注意力に、聞かせ見つけさせること。このやり方でなら、複雑なこの対象も単純なもの(ということとは全体を見渡せるもの)となり、しかも努

力を放棄さえしなければ何ひとつ見落さなくてやれそうだから。

○人間の言葉を音声の連続として聞くことは、いま一度ぼくの耳に聴えている雨だれの音と変りないものとして聞くということだ。意味することへの拒否。あるいは、意味体系の拡張、ともいえる。

○母音という単位(精神測定のための言語的単位)のこと。

○母音という単位。

アレクサンドランの十二音と、五七調(ないし七五調)の十二音との一致。母音を単位として数えると、東西のいずれも、不思議に同数の韻律を選んでいることに気づく。同じ十二音でも6⁶と左右に均衡させるのと、5⁷(7⁵)と、一寸ずらすところに差を感じるのとの、恐らくは民族性の差異はあるにしてもだ。——又、デカシラ

ブと五五調。

また、ユンガーの「母韻頌」を参照すれば、音韻のこ
とばの世界では、各国語の感受性の径庭よりも一致(か
相似)が先ず目につく。

母音を単位要素とした、そして論理を文法規則や統辞
法とする、普遍的な言語(現実中存在しなくともぼくらの
心の裡に存在する)の可能性を、ぼくは垣間見る。

○ぼくがひとつの言葉を、例えばDON……と発音し
かけるとき、その瞬間を反省すると、Dという子音はま
だ明瞭な音にならず、空っぽな精神が或る方向を探し、
ながめ、その方向へ一歩踏みだそう、その方向へ一本の
鋭利な光線を投げかけようとするのを感じる。そして母
音を、この子音Dに一瞬遅らせながらすぐ追いかけさ
せ、幾分鼻にかけながら喉と胸の空洞とでひびかせると
き、はじめて、その精神が見込みをつけた方向へどっと感
情のこもった流れが押し出されるのだ。このときぼくは
この言葉に実質が備ったことを知り、この言葉の意味す

る現実をぼく、流に所有し表現(ex-press)というのは、外
へ、押し出すという意味だ)したと満足する。

○ひとつの語の最初の音を耳にするだけで、聞き手で
あるぼくらの連想の野には、その音で始まる、あるいは
その音を含む、さらにはその音がアナロジーによって想
起させるところの、幾つもの単語や名称が湧きあふれて
いる。だからこそ、(聞き手の側のこういう待ちうけが
あるからこそ)、ぼくらは相手の発言が理解できるし、思
い込みによって誤解することも起るのだ。

逆に、ひとつの音に、この音に通じる幾つもの語が連
なっていればこそ、人間の頭のなかの語彙の貯蔵庫には、
わずかなスペースで、しかも整頓され分類されたかたち
で、大量の語が収納され記憶されているのだ。たかだか
数十個の音による、ものの、外界の、分類。

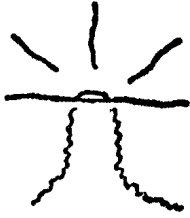
○音自体が意味をもつこと。

例えば「また」という音は、数字の二に関係する単語

と結びつく。回数を表わす「又」(二度目)。身体の部分「股」(二本足のつけね)。及びこれらのそれぞれの派生語・兄弟語。(これを漢字の成り立ちとは別に考えてみる。何故なら、「また」という音(ここでは音訓の音の意ではない)は恐らく日本の語音であろうからだ。)

○昔、ひとつの漢字をじっと長時間ながめていたり、あるいはその漢字を何度も何度も紙の上に書きちらしている、一つ一つの線や点がばらばらにとび散って字形と意味とのあいだに関連がなくなり、例えば「光」はどうして光なんだろうと考えたことがある……。

しかし今、「光」という文字をながめるとき、それはこんな風に見える。



それは海に沈む(あるいは昇りつつある)太陽のひかりだった。そしてこの文字の形姿が、かつていわばものの上に眼を近づけすぎて視界を失ったぼくの注意力を、しっかりと、遠近法の近すぎも遠すぎもしい程よい一点につなぎとめようとしているのを感じる。

くわしく言えば、ぼくはある小説を読書中であり、場で夕陽を見つめている人物と情景とを具体的に想像しようとしていたぼくの読書力に、ぼくが助けられたのも本当だ。ぼくの注視力は、この光という一文字をにらみつけながら、昔の絶対的に破壊的なちからがこの積木を崩そうとこの組立のもろい中心へかけ寄ろうとするのを、そして同時に、このちからを未然にとり押さえ、この五、六本の棒切れの組合せの背後から、本当の太陽の光がかがやき出るのを守ろうとする建設的な想像力の動きを、さらに、このふたつの力がからみあって相撲をとり、りきみ合ったまま危うく平衡状態に在り両者のちからがうちふるえているのを見る。そしてこのふるえは、首をちよつと出した赤いゼリーののような太陽がゆらめき

ながらさらに昇ろうとするのを、海面がだきかかえひっこめようと全身に小波立ち、チラチラ光線のゆらめきを反射している様に似ているのだ。

○言葉や文章の意味(語義や文意)をではなくて、それらの言葉や文章の指し示すところの *realite* を見ようと努めること。

○言葉は、現実の事物を型どる鑄型のようなものだ。虚無のまわりをとりかこんで、言葉はその虚無の形に可能な限りぴっちりと密着した、凹んだネガティブな雌型を形造ろうと努める。ぼくらはその雌型のなかにぼくらの想像力という熱く、溶けたブロンズを流しこみ、その鑄型をうずめ、虚無だった空間の形、ポジティブな立像を生み出すのだ。書く人はそんな風にして現実を獲得しようとする。けれどやくざな言葉しか持たないぼくは、奇怪な銅塊をしか得ない。

○どんな言葉(語、文章)も、(その指し示すところの)各々の現象(現実)を定着していること。

文体は、その現象(現実)にたどりつくための通路。

○語義というのは、その語の示す現実に到達するため
の通路(あるいは手段)にすぎない。

○ひとつの単語のいくつもの意味(語義)や用法は、人間の世界認識や観察のいくつもの有り様の反映なのだ。意味や用法の数とそれらの変遷とは、その語の指し示すところの現実を前にした精神が働き獲得した認識の痕跡の数と歴史だ。

何故なら、その語を、その国のその時代の人々は、自分の思考の内部世界に対応する位置と姿勢とに、文章のひとつづきのなかで配置し、その語に己れの思考の或る部分を象徴(でき得るならば直接指示)させようとするからだ。だから、その言葉は、いつしか幾世代もの人々の願いに染って、その語義という、かれらのものの見方を

映し出してきた鏡を、自分の形姿そのものとしてとるようになるのだろう。

こうして言語の体系が、ぼくたちの精神の構造と働き（つまり論理）とに幾分似て来、またそれらと血を分け合ってきたので、精神が言葉を選ぶとともに、言葉の方がぼくらの精神を導くということが起るのかもしれない。言葉の全体が、ぼくたちの（民族の）いわば感受性と思念との無意識層を形成しているのだ。

○一つの語に幾つかの語義がある場合、それらの語義は、その語のいわんとする（指示する）或ることがら（事実、*réalité*）が現実存在する際に見えるその幾つかの側面なのだ。

最初その語に意味が一つしかなかったとしても、その語の指し示す「もの」の性質（側面）が、時とともに、多くの人々によって、種々発見、認識されるに依じて、その語も、その発見、認識と同じ数の語義をもつにいたるだろう。時代により土地により、或る語義が特に好んで

用いられることもあれば、忘れられやすかったり、すっかり捨てられてしまうこともある。それは、そういう時代と人々の思想とともに歩む歴史だ。しかしその使用されなくなった語義は、その「もの」が、その語義に対応している側面を持ちつづけているかぎり、いつか再発見、再認識されて、すっかり使い古された語義のおかげで陳腐になりかかったその語を、新しく建てなおすため（つまりはその「もの」を救うために）、再び復活することも起るだろう。

○一つの単語に幾つかの語義の生れる所以は、その語の基本的な意味（あるいは一番最初に意味し指示した物なり行為）のもたらす幾つかのアナロジーにあるのだ（例えばフランス語の *tirer*）。

逆に、そもそも二つ以上のものの中にアナロジーを直感し見つけるといふことは、人間の外界認識の行為が、外物と一対一の対応する何か或るものを、外物と同じ数だけこしらえて、頭の中でそれらを操作しているのでは

なくて、無数に存在する外物を幾つかの有限個の要素（或いはカテゴリー）に区分けし、仕分けして、要するに外界を分類しているということなのだ。

一つの単語に幾つかの語義があっても、逆にその語義たちを一緒に並べて、その共通な、基本的な一つの事物（抽象物）に到るとき、そのさかのぼる行為を通じて（によって）ぼくたちに分ることは、人間の認識が、ごく限られた数の持駒を使って棋譜を描いている（盤面を埋める手をこしらえている）のだということである。

語義の数は、だから、人間の精神がアナロジーを見つけたその回数であるから、今後どういうアナロジーを、ぼくたちが、その単語を用いて発見するかに応じて、新しい語義とその数とが変化し増減してゆくのだ。

○テスト氏の仕事を、「顔」と、それがとる無数の表情の比喩によって説明すること。

人間の顔というものはしよっちゅうぼくたちの眼前にあると思っっているが、実はあるのは「顔」ではなくて、そ

のときどきの表情にすぎない。顔とは、逆説的なことに抽象的なものであって、状況が強いるところの、個々具體の、無数の表情から抽象（抽出）された、いわば構造体（或いはシステム）のようなものだ。ひとつひとつの表情は、この構造（骨組み、システム）のとる様々な動きであり運動の形態の一つであって、いうならば無限の可能性、可変性をもつものなのだ。（この構造体あるいはシステムを動かすものが生命である。）

テストは、世界の諸現象の無限個の可能性を蒐集するため、注意力を休ませることなく努力しつつ、かつ同時に、それらの可能性から単（純で唯）一の体系（構造）を抽象する仕事に従事している。彼はその構造（体系）を求めて世界の可能性を無際限に探り、又逆に、この無数の可能性が、その構造を探り当てるようにと、彼を誘惑してやまないのである。テスト氏の、抽象と具体の間の、この力強い往復運動。……

この比喩を、言葉（単語）（「顔」と、その語のとる幾つかの（或いは無数の）意味（文脈上の、又状況上の）（「表

情に当ててみれば、何故言語が、何故ぼくたちの現実世界の構造解釈となり、或いは反映像となっているか、又、言語の表現するもの(文章)に、それを読み聞く者たち百人の想像力(読書力)が百個の解釈(具象^{イメー}像)を注ぎこんでも壊れることなく意味を伝達しうるかの説明が得られるだろう。

○語源を調べることは、

—語義をたくさんもつその語の全体、の形姿を、具体的(具象的)につかむこと。

○「或る言葉の歴史」

或るひとつの単語の意味の変転の様を(その変遷の原因を、その愛用され、忘れられ、又再びよみがえるさまを、これを愛し捨て見出し瞑想する人々——何代にも何代にもわたる人々——を、社会を、そしてこの語自身の構築する世界を、又長い年月生きたこの語自身の抱く感想を……)描く物語を本をつくること。

○外国語のひとつの単語と、それに基本的な語義で対応する(と考えられる)別の国語(例えば日本語)の単語(一例をあげれば *tenir—take—とる*)とが、その共通する基本的な語義から派生するところのいくつかの語義をも、不思議に共有することの多いということについて。

例えば *creuser* は穴をあける、うがつの意味だが、同時に抽象的な意味をもつて、ものごとを深める (*approfondir*) という、日本語の「うがつ」が有する語義をももっている (*creuser une idée etc.—「うがった考え」等々*)。

ここには、人間の認識能力が、基底部では、民族などによって異なることのない(普遍的な)構造をもつことの一証拠があるように考えられるが、それを証明し、断言(できるとして)するために、どういう手順を踏めばよいのだろうか。

○「意味の三段階

——知性的

叙述的

想像的——……」(ブラックマー二五一頁)

○名詞や動詞や形容詞や接続詞等々の起源や機能を観察すること。

ひとつの名詞を見、この名詞の指し示すひとつの現実
に到るために、読む人間が、自分の記憶のなかをどのよ
うに試行錯誤するか、その行動の軌跡やその行動の経験
する心理などを確めること。また、この名詞を修飾する
形容詞が、この名詞を限定する(ひとつの名詞の意味する
広大な—或いは漠とした—拡がりに、制限を与えて、こ
の意味の世界を一層明確にするのが、形容詞の働きのひ
とつだと思われるが)その機能を、現にいま限定している
その行為の最中をとらえてよくみつめること。形容詞の
限定の仕方には幾通りかあると考えられるが、そのどの
タイプに属するか、この名詞と形容詞とをながめ、意味
と現実とを探索している(つまり読書している)読み手の
心の動きを注視しながら研究すること。

こんな風な観察を無数に重ねれば、人間が初めて言葉を
を発明したその心理、その必然、又、接続詞といった、
恐らくその発生が他の品詞に較べておそかったように見
える(並列の接続詞は最初、沈黙で代用されたかもしれない
のだ。これはぼくの空想だが。)品詞の起源や働き等を
認識することができるかもしれない。

さらには「音」の意味するもの(多分、人間が発音する
際、その言葉の示す意味と、彼の心の奥深いところでは、
親密な関係があったのだと思う)を知ることができるか
もしれない。

○四種類のことば

1、名詞、及びその修飾語句(冠詞、形容詞等)

——「物」を指示することば

2、動詞及びその修飾語句(副詞等)

——「物」の存在や行動を描写することば

3、前置詞、接続詞

——「物」と「物」との関係を示すことば

4、感投詞、擬声語等

——「物」を見る人の声、「物」の発する音

前置詞や接続詞は、「もの」と「もの」との間に、論理的、空間的・時間的な関連づけ、秩序づけを行うことばだ。名詞のように、「もの」と一対一の対応する類のことばと異なり、現実の「もの」と別の「もの」とを見て、見ているその人が判断し解釈し推理するところの二者間の関係を指示する類のことばなのだ。

だからこそ、前置詞や接続詞というものは、同じ一つの語ながら多様な、ときに互いに相反するような語義（又は用法）をもつこともあり、幾つかの語が互いに識別しがたいような似た意味をもつことが起るのだ。

○表現のための一番大切な要素としての名詞——即ち、文頭に書かれること（主語と称される）。

次に続く語要素群は全て、この名詞（つまりこの名詞が指示するところの「もの」）を描写し修飾するものだ。

即ち、この「もの」（名詞）を修飾し、描写するものとしての動詞。

動詞の三種の形態（存在動詞・自動詞・他動詞）は、その「もの」（名詞・主語）の行動を写している（人間が行動するように、動詞もまたその行動を真似て動くのだ。

cf. 動詞変化等）。即ち三つの型の行動があること。

(1) 存在（世界にその「もの」が或るかたちで存在していることの主張。SVC）

(2) 自足した動作（SV）

(3) 主語の指示する「もの」と、それとは別個の「もの」（目的語）との間の関係、交渉、働きかけの描写（SVO）

いわゆる名詞指示語（冠詞・形容詞等）とは、この「もの」（名詞）のかたちを描写し形容するもの。

こうして、主語以外の全てのものが、話者が語りたいたいと考えて主語としたところの「もの」について語り、明示し、描写し、修飾するのだ。

○名詞は、その名詞が指示するところの「もの」と、
 一対一の対応をする。

ひとつの文は、必ず、その文の主語となっている語
 (名詞)が指示しているところの「もの」に関する何らか
 の言及となっている。

世界にはまず「もの」があって、その「もの」の色彩が青
 かったり、その「もの」が動いていたりする。

○抽象名詞をそれぞれ神々として(昔の神話のように、
 また人間や獣たちの形をしたものとして)空想しながら
 読むこと。

抽象名詞が主語となり、人間や動物の行為から借りて
 きた動詞を平然と、比喩的にではなく、(ぼくたちの国
 語表現には思いつかない語だ)とすることの理由。こうい
 う表現法は、神話の時代の人々の自然観や人間観、運命
 観(要するに世界観)を反映して伝えられてきたようには
 思えないだろうか。

○抽象名詞の存在は、まるで外物のように見えるよう
 になった精神内部の思考と、かくこの思考を外物のよう
 に精神の暗闇のなかに透視できる精神の能力との存在に
 対応している。抽象名詞の成立と、対象化され可視的と
 なった思念、及び当然のことながらそれらを凝視する能
 力の誕生とは、軌を一にしているのだ。

○その名詞の指示するものは

—— 具体物か

—— 抽象的なものか

—— 行為か

—— 状態か……

○百科事典ではなくて、その国の国語辞典に固有名詞
 を載せる場合には、その名の由来を書く必要がある。(言
 葉の辞典と事物の辞典との違い)その固有名詞の由来を
 通して命名行為の経緯を示すのでなければ、その語を言
 葉の辞典に記載する意味がない。

○著者が自分のことを nous と称するか je(moi)と言
うかは、むしろ、日本語の場合に、筆者が「私」と書く
か「ぼく」を用いるかの際に感じられるニュアンスの差と
似た差異があるのではないか。 nous に著者以外の協力
者たち(印刷屋、編集者、等々)が含まれていると考える
よりも(それは事実としても)。

○(形容詞)

名詞のまわりに(前に、後に)まといつく形容詞。丁度
この木箱に塗られたペンキの赤い色のように、またこの
四角の形状のように。木箱をさまざまな属性がとりかこ
んでいるように、この「木箱」という名前の周辺を幾つも
の形容詞がとりまいていて。そして形容詞が幾つか並置
される場合、属性の発見の順序が、形容詞の置かれる位
置の順序なのだ。

○(形容詞)

フランス語で形容詞が名詞を後から形容する様をなが

めていると(例えば une boîte verte) 紙の上に先ず一
個の箱の絵を線で描いて、その後で箱を緑色に塗る行為
を想い浮かべる。その時間的な順序が語順に反映してい
るのだ。

○(つづき)

言葉(三つの言葉)で或る事物を命名(あるいは再命名)
しようとする行為と、線と色とで同じその事物を描こう
とする行為との類似性^{アナロジー}が、この二つの、カテゴリーを異
にする行為の下に存在するのだ。

このような両者に共通な行為、二種の行為から抽象さ
れる行為が、人間の裡にある或る単純な「体系」の一つの
現われと言えるのではないか。

○人間の無数の行為の分類化の試み——これは、動詞
の数が有限個数である点に反映されている。(とりあえ
ずフランス語と日本語の全ての動詞を列挙する作業に、
いつかとりかかってみる必要がある。)行為を分類する代

りに、(机のうえの紙の上で)動詞を分類してみることに。

恐らく様々な分類法があることは予想できる。

自動詞、他動詞、存在動詞の三大別。

人間の身体の各部にまつわる動詞群形成の分類法。：

…等々。

しかしこれらの、いくらあるか分らぬ分類法自体を分類してみる必要がありそうだ。……

○存在動詞(Be, être etc.)のみならず全ての動詞には、前提として存在の意が含まれている。動詞とは、或る「もの」(主語)が存在し、かつ行動することを言明しているのだ。

○感投詞は大抵の場合少数の文字からつくられていて短い。感動時の持続が短いこととの対応。

○句読点をつけることの恣意性と必要性

(1) 意味のとりちがえなどを防ぐための、統辞法上

の符号。

(2) 喋っているひとの息の切れ目のおのずからの表われ。

(未完)